



「琉球建築」史話

理事長 高橋 康夫

はじめに

沖縄県はかつて東アジアの一つの国、琉球王国でした。その琉球王国の建築と都市の歴史や魅力を、わかりやすく伝えたいと考えています。

対象とする時代は、琉球王国が存続した15世紀から19世紀中頃までの時代、いいかえると、古琉球と近世琉球の時代にあたります。一方、対象とする地域は、いうまでもなく琉球王国の版図（奄美諸島・沖縄諸島・宮古列島・八重山列島）ですが、「都市」も主題とすることから、おのずと中核をなす地域であった沖縄本島にフォーカスすることになります。

琉球王国の主要都市である首都首里と海港那覇を中心に、いくつかの都市や集落、また主要な建築類型（住まい・宮殿、宗教建築など）、琉球の歴史と文化を象徴するグスクを取りあげます。さらに伝統的建造物群・文化的景観・名勝・史跡などの文化財についても視野に入れるつもりです。

それらを、東アジアやさらに広くユーラシ

アのなかでとらえること、また琉球の風土・地域・生活・生業、歴史まちづくりなどの視点から眺めることなどによって説明しようと考えています。

ところで、“琉球建築”に取り組もうとするとき、根本的な難題が横たわっています。それは、沖縄戦による甚大な被害のため、建築遺構はもちろん、文献史料などもきわめて少ないことです。当然の結果として宮殿・邸宅・民家や寺院・神社などの個別研究の蓄積が乏しいという、大きく高い壁が存在しているのです。

こうしたこえがたい限界があること、沖縄に住んだ経験がないので琉球・沖縄文化の体感に乏しいことを自覚しながら、“琉球建築”に向き合おうと思っています。近年の琉球史研究、とくに歴史学と考古学の目をみはるような進展によって、都市と建築の歴史にも光が射しこむようになってきたからです。多くの先学による学的蓄積があるので、まったく成功の見込みのない無謀な試みをするわけではないと信じています。

第1話

わたした島、ウチナー ～世界から琉球へ、沖縄から世界へ

‘わたした’は私たち、‘ウチナー’は沖縄なので、‘わたした島、ウチナー’は、私たちの島の沖縄ということです。しかし島は、まわりを水で囲まれた陸地、庭園、集落・村落など、いくつもの意味をもっていますし、さらに日本でただ一つ、島々だけからなる沖縄県・琉球では‘くに’や‘ふるさと’も、意味しています。つまり、‘わたした島、ウチナー’とは、私たちの島であり、‘くに’であり、‘ふるさと’である沖縄、ということなのでしょう。この独自の歴史と文化をもつ‘島’、沖縄・琉球の歴史をかんとんにお話しします。

一 ユーラシアのなかの琉球

激動の東アジア世界

14世紀後半の東アジアは動乱の時代といえるでしょう。1368年、中国では元を滅ぼした朱元璋^{しゅげんしやう}が明王朝を創建し、1392年、日本では足利義満が南北両朝を合併して統一を果たし、翌1393年、朝鮮半島では李成桂^{りせいけい}が朝鮮を建国しました。

ところで、元の末期、国内外の治安が悪くなったため、日本と中国の往来はそれまでの日本・博多と元・寧波（明州）を直行する航路（大洋路）に代わって、琉球を経由する南島路（肥後高瀬－薩摩－琉球－福建）が利用されることになりました。

この新たな状況のなかで、琉球の情報も明にもたらされたのでしょう。1372年、明の太祖（洪武帝）は楊載を派遣して「琉球国」を帰順させようとします。中山王察度はこれを受けて、初めて明へ進貢しました（朝貢貿易の始まりで、1874年まで続きます）。1383年には洪武帝は「琉球国中山王」の察度に鍍金銀印を下賜します。その後の1385年、琉球国の山南王と山北王にも鍍金銀印を下賜しました。これにより琉球国は、三山に分裂したままで明の冊封体制下に入りました。

明朝は、1383年には琉球の三山の抗争を知り、和平を命じていたのですが、三山の統一が実現したのは、40年ほど後の1422年のことでした。尚巴志^{しやうはし}が中山王・山北王・山南王を打倒したことにより、ここに名実ともに琉球国が樹立されたのです。1407年、明の第2代永楽帝の冊封使が琉球に渡来し、尚巴志の父尚思紹を「琉球国中山王」に冊封しました（第一尚氏王統）。

永楽帝は、1402年に室町幕第3代府将軍足利義満を「日本国王」に、1403年に李氏朝鮮の第3代太宗を「朝鮮国王」に冊封しています。こうして東アジアの国々は明の国際秩序のなかに組み込まれたのです。

ひと・モノ・情報の伝来と受容

15世紀には、琉球の海上貿易は東南アジアに広がりました。沖縄の特産である泡盛（米焼酎）は、シャム（現在のタイ）との交易にともなって蒸留技術が伝えられたといえます。ちなみに2016年には世界遺産の勝連城跡の14～15世紀の地層から3～4世紀のローマ帝国のコイン（銅貨）4枚が出土したことが報道されました。これらのコインが琉球に持ちこまれた経緯や使い方などはわかっていませんが、琉球がユーラシア交易圏の一環、中継地であったことを物語るものでしょう。

第一尚王統が拠点とした首里城の正殿には、有名な万国津梁の鐘（1458）が掛けられていました。その銘には、琉球国は南海の勝れた地、蓬莱の島である、船が万国の架け橋となり、海上交易のおかげで国中に異産至宝が充満している、また三韓（朝鮮）の「秀」を集め、明は「輔車」（ほお骨と下あごの骨）、日本は「唇齒」にあたる、とあります。琉球国王が自分の国を、また周囲の国々との関係をどのように意識していたかがよくわかります。



首里城正殿に架けられた万国津梁の鐘（複製）

国王の代替わりに明朝が派遣した冊封使、そして朝貢貿易によって、琉球に膨大な文物がもたらされたことはいうまでもありません。また琉球の仏教史に名を残した二人の禅僧——日本で禅を学んだ琉球の溪隠安潜と、日本から琉球に渡って多くの禅寺を建立した芥隠承瑠——は、日本・琉球の交流の明証でしょう。1455年に朝鮮国王から方冊蔵経（大蔵経）

を贈られ、これによって天界禅寺を建立したことは、朝鮮の「秀」を集めたことを示すものといえるでしょう。

尚巴志の第一尚王統は首都首里や海港那覇の大造営をおこないますが、わずか数十年で滅ぼされ、1470年に尚円しょうえんが即位して第二尚王統（～1879年）が始まりました。冊封・朝貢体制とともに首里と首里城、また那覇港を引き継いだこの王統は、尚円の後を継いだ尚真（在位1477～1526）の時代に、東アジア・東南アジア交易の最盛期を迎え、独自の琉球文化を創りだしていきます。

とくに建築文化を示す遺構として、世界遺産・国宝の王陵、玉御殿（1501）や世界遺産・重要文化財の園比屋武御嶽石門（1519、拝所）、重要文化財の旧円覚寺放生橋（1498）、天女橋（1502）、旧崇元寺第一門及び石牆（1527以前）があります。

16世紀——激変する東アジア

さて、尚真の死去、尚清（在位1527～1555）の即位のころから東シナ海をめぐる情勢は混迷を深めます。明をしないで弱体化させたのは、北方でくり返されるモンゴル人の侵入、そして南方で生じた倭寇の活動でした。1522年（明の嘉靖元年）から約40年ほど続きます（嘉靖大倭寇）。倭寇といっても、中国人が大半で、日本人は3割ほどだったようです。

倭寇は琉球にも影響を及ぼし、尚清は首里城の城壁を築き、また那覇港を防御するために三重グスクと屋良座森グスクを構築しています。

東アジアの海域には中国と日本のほか、ヨーロッパからポルトガルも進出するようになり、琉球の海上交易は衰えていきました。

東アジアは16世紀もまた激動の時代となりました。世情不安は明だけではありません。戦国時代の日本では室町幕府の弱体化が進み、16世紀半ばから下剋上と戦乱が激しくなります。朝鮮半島でも李朝の動揺が続きます。新旧勢力の交替と社会体制の変革の時代、つまり近世の胎動期であったといえるでしょう。

二 日本と明・清のあいだで

島津侵略（1609）

日本と明、李朝、琉球それぞれの政情・社会経済の不安がたかまり、さらに四国間の関係が変動し、そのひずみが琉球に集中しました。

とくに、天下統一を果たした豊臣秀吉は1591年、日本・朝鮮・中国を領土とする構想のもと、明を攻めるために全国の大名に朝鮮出兵を命令しました。日本と明・李朝とあいだに戦争が勃発します（文禄・慶長の役）。このとき秀吉が求めた援軍の派遣を拒んだことなどから、日琉関係に暗雲が立ち込めました。

江戸時代となった1609年、薩摩の島津家久は徳川家康の了解のもと、3000の兵を送って琉球を攻略、征服しました（島津侵入）。琉球は、薩摩の支配を介して幕藩体制に組み込まれることになりました。なお、奄美諸島は薩摩藩の直轄支配下におかれました。

日本との関係は、かつての「唇齒」から琉球の自立・自由を束縛する「軛くびき」に変質しましたが、その一方で江戸幕府の思惑もあって琉球王国は存続することになり、明そして清（1644年、北京遷都）との冊封・朝貢関係も維持されました。

こうして近世琉球は日本と中国の双方に帰属し、日本と清のはざまに生きることになりました。江戸幕府將軍の代替わりごとに慶賀使の江戸上り、また琉球国王の代替わりごとに謝恩使の江戸上りと清の冊封使の来琉があり、いずれも文化交流に大きな役割を果たしました。

文化の興隆

その後の琉球は、日本と清からそれぞれの文化を積極的に摂取しつつ、そのために琉球の中国化——風水思想、儒教、漢詩文、清明祭、亀甲墓などの受容——、そして「大和」化——住まいの様式（床の間・竿縁天井・畳）、立花、茶道、浄土宗と盆踊りなどの受容——

が進みます。

しかしながら、国際関係と国内統治が安定し持続したことから、18世紀には琉球独自の文化もめざましい発展をとげます。こうして「琉球王国の黄金時代（ルネッサンス）」とも呼ばれる時代が到来しました。

琉球王国の史書『中山世譜』(1701)・『球陽』(1745)、そして地誌『琉球国由来記』(1713)・『琉球国旧記』(1731)が編纂されています。また組踊り（歌舞劇）が創作され、芭蕉布の絣などの琉球織物、堆錦の琉球漆器などの美術工芸が発展しました。泡盛の量産も、この時代のできごとです。

琉球王国の衰退

薩摩藩と琉球王府が課した重い税負担は、18世紀後半からシマ（村）をしいだいに疲弊させ、19世紀には税負担能力を失った村々が続出しました。王府財政の窮迫という重大な危機にさらに追い打ちをかけたのが、1816年のイギリスをはじめとして、フランス、オランダ、アメリカ、ロシアなど列強の軍艦や艦隊が来航し、開港と通商を要求したことです。軍事組織をもたない琉球は、1854年にアメリカ、翌年にフランス、1859年にオランダと、あいついで修好条約を締結するほかありませんでした。

こうして琉球王国は、日本そして世界に押し寄せる近代化の激流に呑み込まれていきます。明治新政府は、1872年に琉球藩を設置し、さらに1879年には琉球藩の廃止と沖縄県の設置を強行します（琉球処分）。15世紀初めからおおよそ450年にわたって独自の文化を築いた琉球王国はここに滅亡しました。

三 沖縄から世界へ

1899年のハワイ（オアフ島）への移民が沖縄県の本格的な移民のはじまりです。海外移民は、極度の貧困と過剰人口を解消するやむをえない方策でした。移民の人々が稼いだお金を故郷へ送金したことによって、県の経済

も支えられたといえます。

その後、北米・南米など世界に広がった海外移民は、人々の心に深く根ざしていた琉球の伝統的な生活文化を、世界各地の小さなオキナワに移植し、育みましました。シマ唄・三線・カチャーシーや郷土の食文化、親睦と資金融通の「模合」（頼母子講）などは、オキナワ移民社会の基盤となりました。

今、沖縄からの移民の子孫が世界中におおよそ42万人いるといわれています。沖縄県の人口が143万人（2020年調査）なので、ウチナーンチュ（沖縄人）が185万人ほどいることになります。

5年に一度の祭典「世界のウチナーンチュ大会」にも海外から多くのウチナーンチュが参加しています。第1回（1990年）が19の国から約2,400人、第6回（2016年）には29の国・地域から約7,400人と、回を重ねるごとに増え続けています。沖縄を、その歴史と文化をアイデンティティとする人々にとって、ウチナーネットワークの発展、持続が大切であるからでしょう。それは、現代の、そして未来の「万国の津梁」のようです。

これまで周辺諸国との関係から琉球・沖縄の移り変わりを述べてきました。これは、大きく古琉球と近世琉球、近代日本（沖縄を含む）に分けて、琉球史をざっと眺めたということでもあります。

古琉球と近世琉球は、それぞれおおよそ日本の中世と近世にあたります。琉球史では古琉球の時代をさらに細分して、グスク時代、三山時代、第一尚氏時代、第二尚氏（前期）時代としています。また琉球王国時代というと、第一尚氏・第二尚氏時代、あるいは15世紀初期から19世紀後期にいたる琉球王朝の時代のことです。

琉球史と日本史の時代区分

日本		琉球		備考		
原始	旧石器時代	先史時代	旧石器時代	14000年前 日本：仏教伝来大陸文化の受容		
	縄文時代		貝塚時代			
	弥生時代					
	古墳時代					
古代	飛鳥時代 592～		古琉球		グスク時代	11世紀 13世紀末 仏教伝来浦添ようどれ 大陸文化（明・朝鮮）の伝来と受容 1368 明建国三山、冊封体制下に入る
	奈良時代 710～					
中世	平安時代 794～	三山時代				
	鎌倉時代					
	南北朝時代	第一尚氏		1420頃 琉球統一 首里を首都 那覇大造宮		
	室町時代	琉球王国時代		第二尚氏前期	1470 1498 円覚寺 1501 玉御殿 1519 園比屋武御嶽石門 1527 崇元寺	
				戦国時代	第二尚氏後期	
安土桃山時代						
近世	江戸時代 1603～	近世琉球				
近・現代				1879 琉球処分・沖縄県 1945 沖縄戦 1972 沖縄返還		

第2話

青い島、青い森 ～沖縄のエコトープ

第二話では、沖縄の青い空と青い海、そして青い島と青い森、つまり沖縄の風土や国土、その地形・地質・植生、また生活・信仰とのかかわりについて、説明しましょう。

一 青い空、青い海

沖縄といえば、青い空と青い海。あまりにも広大な空と海の境界に、小さな青いシマが点在します。シマの青は、もちろんブルーではなく、グリーン（緑）です。青島や青森の青、交通信号の青と同じです。青いシマ（国

土）の高く盛りあがった地形、山・丘・森は、いずれもムイ（森）と呼ばれます（『沖縄大百科事典』）。ちなみに東北地方でも、森は丘を意味します（『広辞苑』）。

青いムイは、シマと同じように、青々とした木々の緑です。宮崎市南部の小島、青島は亜熱帯性植物のピロウ（沖縄ではクバ、コバ）

の自然林でおおわれています（特別天然記念物）。沖縄でも、代表的な聖地である久高島の北部に神木クバが繁茂しています（県指定天然記念物）。

沖縄県の気候は、広大な太平洋と東シナ海に囲まれ、熱帯と温帯のあいだにあり、季節風（モンスーン）が夏は南西から冬は北東から吹くことから、「海洋性亜熱帯季節風気候」といわれています。沖縄の特色となっている青い空（清浄な大気）をはじめ、寒暖の差が少なく暮らしやすいこと、高温・多湿であること、夏の日射しは酷烈といいたくなるほどなのに、海風のおかげで猛暑日にはほとんどならないこと（那覇市ではこの5年間2日のみ）、夏にはしばしば猛烈な台風に襲われることなどは、こうした気候条件に由来します。

夏・冬の季節風は、琉球さらには東アジアの海上交易を支えた大きな条件でもありました。

このような気候と沖縄の人々の心が結びついて、上る太陽の霊力を崇める信仰が生まれ、そして青い空とオボツ・カグラ（天神、その居所である天上）、青い海とニライ・カナイ（海神、海のかなたにある神々の世界）など、人間界とは異なる他界があるという観念が生まれたのでしょうか。

那覇と京都の気温比較（2020年）

	猛暑日	真夏日	熱帯夜
那覇市	0日	108日	108日
京都市	26日	19日	39日

真夏日：最高気温30℃以上の日

猛暑日：最高気温35℃以上の日

熱帯夜：最低気温25℃以上の日

● 二 青い島、青い森

九州と台湾そして太平洋と東シナ海のあいだを弓状に延びているのが、琉球弧（琉球諸島）です。北の奄美諸島と中央の沖縄諸島（沖縄島など）と南の先島諸島（宮古諸島・八重山諸島など）からなっています。

北東から南西に延びる細長い沖縄島の地形・地質は、もともと幅の狭い石川地峡を境界として大きく二つに分かれます。北部は、「山原^{ヤンバル}」とよばれるように山岳の多い高島の地形で、島状に続く山地の周囲に平らな台地（海岸段丘）が広がり、沿岸の低地には集落がつくられました。

スタジイなどの常緑広葉樹の自然林が広がり、ヤンバルクイナ（天然記念物）が息する沖縄島北部は、2021年7月、奄美大島・徳之島・西表島とともに、世界自然遺産リストへの登録が決まりました。

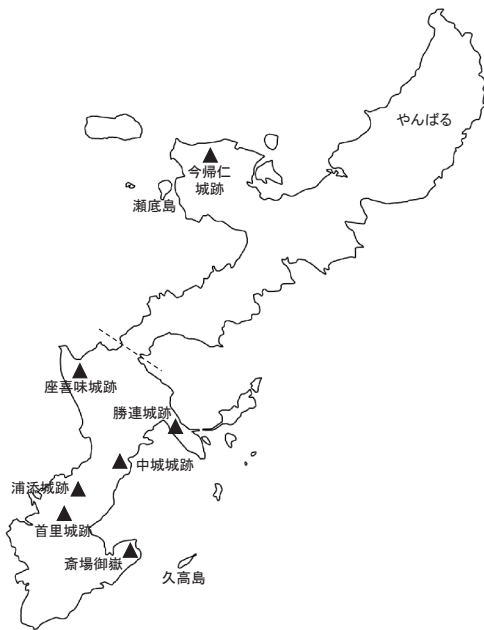
一方、中南部には山地がなく、低島の地形で、高さ200メートル以下の台地・丘陵地です。中南部にはガジュマルやフクギ、ピロウなどが繁茂しています。

この地域の琉球石灰岩台地では崖下などに地下水が湧きだします。こうしたところに集落が発達しました。湧泉などをカー（井戸）と呼び、湧泉に樋をかけたのがヒージャー（樋川）です。

カーやヒージャーには水汲みや洗濯などのための共用施設がつけられ、住民の社交の場ともなりました。首里の龍樋^{チュンナガ}や喜友名泉（重要文化財、1751-1829）、仲村渠樋川^{ナカノカカリヒージャー}（重要文化財、1912）、垣花樋川（南城市）などが有名です。

沖縄島の海岸にもサンゴ礁が発達して、独特の青い海、白い浜となっていますが、これも亜熱帯気候の特性の一つです。島とサンゴ礁のあいだに形成された浅い内海（礁湖）——沖縄ではイノー（礁池）と呼ばれています——は、ウラ（浦）の人々の漁場そして貝藻の採集場として大切な生活基盤となっていました。

ところで、沖縄では台地・丘陵の小高いところは岳・嶽・森などと呼ばれていますが、沖縄の人々は、この山（丘）や森、また巖・水などを信仰の対象としています。御嶽^{ウタキ}（聖域）も、青い森の小高い丘にあることが多いのです。



沖縄本島

身近なところの木々をみると、屋敷林にフクギ、生垣にハイビスカスやブーゲンビリア、並木にフクギやガジュマル、リュウキュウマツ、村を守護する御嶽の奥にクバ（ピロウ）

のムイがみられます。クバは神が降臨する木と考えられています。久高島の北部はクバの群落に広くおおわれています（県指定天然記念物）。琉球王権と深くかかわる聖地の「久高コハウ森（久高のフボー御嶽）」（名勝）や、今帰仁村の「こはおの御嶽」（名勝）などのクバの御嶽は、「聖地としての風致」を伝えています。

さて、沖縄県の県庁所在地である那覇市は、琉球王国時代に首都であった首里と、その外港として栄えた那覇を含んでいます。実は、前近代の琉球に存在した都市は、この首里と那覇、二つだけだったのです。

那覇の地名は漁場を意味する「ナファ」に由来するといわれますが、それが示唆するように那覇の原点は、サンゴ礁の海に浮かぶ島でした。一方、首里（シュリ、スイ）は、地名の由来についてはよくわかりませんが、立地しているのは琉球石灰岩の丘陵です。

首里と那覇の原風景は、それぞれ丘とグスク、島とウラであり、〈青い空・青い森〉と〈青い海・青い島〉という鮮やかな、しかも典型的な対比を示しています。

第3話

赤瓦・シーサー・ヒンプン ～〈伝統〉の残照

沖縄戦による激甚というべき戦災から復興を遂げ、また都市や農村、リゾートの大開発が進行するなかで沖縄は大きく姿を変えてきました。とはいえ、各地に伝統的な民家や集落が今も生きつづけていて、豊かな魅力を伝えています。

一 〈沖縄らしい〉景観

沖縄の風景

真っ白な道や苔むした石畳の道に沿い、サンゴの石垣やフクギの屋敷林に囲まれて、家々がひっそりとたたずんでいます。

青い空と赤い瓦と白い漆喰の屋根。コントラストが鮮やかです。屋根に置かれたシーサー

（獅子）は、門とウフヤ（主屋）のあいだに設けられたヒンプンとともに、災厄からヤー（家）を護っています。また、ウフヤの深いアマハジ（雨端、軒庇）は、強い日射しや激しい風雨を遮ってくれます。

敷地にはウフヤのほか、トングワ（台所）やアサギ（離れ座敷）などが、棟を別にして立っています。いわゆる別棟型（分棟型）の



竹富島の民家景観



玉御殿のシーサー

構成もまた、琉球諸島の基本的な特色です。

このような魅力的な民家や集落、それらが醸し出す雰囲気・情趣、異国情緒こそが、〈沖縄らしさ〉なのでしょう。沖縄・琉球独自の自然と歴史と文化に育まれた琉球建築文化の精華ともいえるでしょう。

沖縄らしい民家や集落の特徴をかんたんにみておきましょう。

赤瓦

沖縄の瓦の歴史は、古琉球の時代にまでさかのぼります。朝鮮半島の瓦とかかわる「高麗系瓦」や日本本土の瓦技術を用いた「大和系瓦」が、浦添グスクや勝連グスク、首里グスクなどいくつかのグスクで使われました。首里グスクの正殿では灰色・褐色の瓦が葺かれていたようです。瓦葺はきわめて例外的であり、ほとんどの建築は茅葺や板葺でした。

近世になると、1670年の首里城正殿再建にあたって板葺から瓦葺に変わり、灰色・褐色・小豆色の瓦が混在して使われています。その

後、少しずつ仏堂や王族などの御殿や殿内などにも瓦葺が用いられるようになりました。ただ、瓦は風雨や火災に強い屋根材なので琉球諸島には適しているのですが、高価なことと身分による制限があったことから、首里や那覇でも普及するにはいたりませんでした。

18世紀前半には赤色の瓦が製造されています。1712年の首里城正殿再建のときには赤瓦も葺かれましたが、ほかに灰色・褐色・小豆色の瓦が混在、使用されていました。

瓦葺が広く普及するのは、近世身分制度とそれにとまらぬ建築制限が廃止された近代、1889年からのことです。赤瓦と白漆喰の民家、集落景観の出現は、どちらかといえば近年のことであり、すぐれた機能に加えて、ステイタスシンボルでもあったからなのでしょう。

戦災消失した首里城正殿は、1992年に復元されましたが、その屋根は伝統のシンボル、赤瓦によって葺かれていました。

シーサー

19世紀末から瓦葺が普及するにともない、瓦屋根にシーサー（獅子像）を置くことも広まりました。火伏や悪霊返しなど、魔除けのためです。

獅子像を魔除けや守護神としたのは古代オリエントですが、中国には紀元前2世紀ころに伝わり、琉球に入ったのは明との交流が始まった14世紀後半以降でしょう。15世紀、尚真王の代に首里城歓会門に据えたのが始まりとされています。玉御殿の屋根や巖頭には3



赤瓦とシーサー

体の石獅子が置かれています。王城や王陵の獅子像は魔除けや守護神であるとともに王権の象徴でもあったのでしょうか。

獅子像は城門や陵墓、寺院、御殿、村落、御嶽などにも据えられるようになりました。那覇市の中心街である国際通りは、もともとは湿地や畠が広がる郊外の道でしたが、1950年代後半から急速に発展し、「奇跡の1マイル」とよばれました。国際通りの両端にはそれぞれ2体のシーサーが置かれ、通りを守っています。

ヒンプン

ヒンプン（屏風）とは、目隠しや魔除けのために出入り口とウフヤ（主屋）のあいだに設けられた屏風、というよりも衝立のような壁・塀・垣のことです。形状も材料もさまざま、一枚岩、琉球石灰岩・サンゴ・瓦の石垣、板垣、竹垣などが用いられています。門のない民家にとっては、道と内部のあいだにバッファゾーンをつくりだす伝統的な手法として、とりわけ興味深いものです。

地域を悪霊から防ぐヒンプンとして、道の真ん中に立つ巨木、「名護のひんぷんガジュマル」（国指定天然記念物）が有名です。



中村家住宅の石垣とフクギ、ヒンプン

ちなみに中国では屏・照壁・影壁・照牆・牆壁などとよばれ、多くは磚や土で築かれました。およそ3000年前、西周初期の宗廟につくられたものが最古とされています。

屋敷囲い——石垣（石牆）・屋敷林

都市や集落、住居、城塞、墓、宗教施設、聖地などを石で囲うことは、古くから世界的に見られます。琉球・沖縄も、石囲いを多用する地域の一つです。うるま市の仲原遺跡の堅穴住居址では、拳大から人頭大の石灰岩塊で堅穴の縁どりをしていますが、この石組みも石垣の一つでしょう。この遺跡は「沖縄編年中期（高宮編年前第V期）」、本土の「縄文晩期」（紀元前1000～300年）とされています。ちなみにグスクということばの核心にあるのは「石囲い」ですが、広く聖域や集落、城塞・城郭を意味するようになりました。

16世紀には、首里の「富家・貴族」が周囲に石を積みかさねて牆をつくり、家を衝っていたという記録が残されています。琉球国王の宮殿、また死後の宮殿ともいえる玉御殿(国宝)は、琉球石灰岩の高い石牆で囲まれています。この時代の石造建築文化の粋ともいえるでしょう。

近世琉球では、瓦葺と同じように、石垣で家を囲うことも身分による建築制限の対象に含まれていました。そのため屋敷の石垣も、近代になってから広く普及しました。

首里や那覇ではステイタスを誇った石垣ですが、地方や離島では海からサンゴを切り出して積み重ねるなど、風土にふさわしい美しい石垣をつくっていました。

ところで、地方はもちろん首里や那覇においても、多くは樹木を植え並べた生垣でした。17世紀おわりころの首里城下の崎山では細い竹を植えて牆にしていました。すまなく茂った葉と細い枝で、高さは一丈（3m）をこえず、削ったように平らでまっすぐに剪定されていたといいます。村々でも同じであり、広く清潔な道に沿って細葉の小竹を編んで生垣とし、葉を剪ってそろえ、方形に整え、目をこまかく密にしていた、と記されています。なお、竹のほか、黄楊（ツゲ）や「十里香」（椿）なども植えられていました。

屋敷囲いの一つとして、防風・防火機能と美観を備えた屋敷林があります。今もよくみ

ることができるのは、フクギを植え並べた屋敷林でしょう。中村家住宅（重要文化財）では三方を琉球石灰岩の石垣で囲み、その内側にフクギを植え並べています。また、屋敷林が美しい集落景観をつくりあげているのは、「なきじんそんいまどまり今帰仁村今泊のフクギ屋敷林と集落景観」（重要文化的景観）が代表的といえるでしょう。緑豊かなフクギ屋敷林が風から村と浜を守っています。

民家と集落

沖縄前近代の民家は、現代そして近代とは大きく異なる姿をしていました。赤瓦やシーサー、石垣、ヒンプンなどは、明治時代になってようやく民家に普及したのです。しかし、戦災と戦後復興、また住宅建築の鉄筋コンクリート化によって赤瓦屋根の多くが失われていきましたが、本島各地、また首里でも、まだ赤瓦の伝統民家をみることができます。

沖縄の美しい集落景観を伝える代表的なところというと、重要伝統的建造物群保存地区に選定された竹富島や渡名喜島でしょう。ともに白砂の道にそってテーブルサンゴや琉球石灰岩などを使った石垣、屋敷林のフクギ並木に囲まれた屋敷がならび、道路面より低く掘り下げられた敷地に、赤瓦・白漆喰の屋根が美しい伝統的な民家が立っています。



宮良殿内の石垣と道より低い敷地

渡名喜島で最初に瓦葺の家が建てられたのは1892年で、その後10年ほどのあいだに茅葺から瓦葺の屋根になったといえます。一方、竹富島ではわずかながら茅葺の寄棟屋根もみ

られます。

今もこうした伝統景観は沖縄各地に息づいています。これらはときに「沖縄の原風景」といわれますが、むしろ沖縄近代が創出した〈伝統景観〉のクライマックス、あるいはその残照というべきものでしょう。いずれにしても、亜熱帯の風土のなかで、沖縄の人々の生活と生業がつくりあげた魅力的な景観であることはいうまでもありません。

二 沖縄の文化財

ウチナーンチュの宝

沖縄（ウチナー）は沖縄島のことですから、ウチナーンチュも沖縄本島人をいうのでしょうか、今や、広く沖縄県人、さらに広く世界各地の沖縄県系人と理解したほうがよいようです。

そのウチナーンチュにとって大切な価値のある文化遺産を、沖縄文化遺産と呼ぶことができるでしょう。それは、指定・未指定にかかわらず、ウチナーンチュの生活、歴史と文化の理解のために欠くことができない有形、無形のものすべて、です。沖縄とその文化遺産は、世界各地に広がったウチナーンチュの‘こころ’のよりどころといえるのではないのでしょうか。

ここでは国指定の重要文化財建造物を中心に、沖縄文化遺産の一角を概観することにしましょう。

沖縄最古の建造物

古琉球から近世琉球のすぐれた建築、戦前の旧国宝建造物は、沖縄戦により被災し、多くが消滅してしまいました。しかし幸いにも、いくつかの古琉球時代の石造建造物が生き延びることができました。首里とその近辺に立地することを思えば、奇跡的といえるでしょう。

いずれも第二尚王統の第3代尚真王（在位1477～1526）の時代、古琉球の最盛期ともいわれる時代の建立です。年代順に列挙します

と、旧円覚寺放生橋（1498）をはじめとして、玉御殿（1501）、天女橋（1502）、園比屋武御嶽石門（1519）、旧崇元寺第一門及び石牆（1527以前）などです。

沖縄県現存最古の建造物である旧円覚寺放生橋は、尚真王が創建した王家の菩提寺円覚寺にあります。円覚寺の開山に迎えられた芥隠承瓊は京都・南禅寺にゆかりのある日本の禅僧です。円覚寺の前に掘られた円鑑池の中之島には、朝鮮国王から贈られた方冊藏経を納める経蔵がありました。その中之島に架けられたのが天女橋です。放生橋は桁橋、天女橋はアーチ橋ですが、ともにすぐれた意匠をもつ石造の橋です。



旧円覚寺総門と放生池、放生橋



天女橋と弁財天堂・円鑑池

玉陵は、尚真王が造営した琉球最大規模の王家の墓です。玉陵は玉御殿（たまうどうん）の漢訳ですので、本来の正しい表記であり、しかも本質的な意味を表現する「玉御殿」を使うべきだと考えています。以下では玉御殿と表記することにします。

玉御殿は、首里グスクの外、守礼門前の綾門大道あやじょうに面して南側にあり、琉球石灰岩の丘陵上、北側斜面の岩壁に拠って造られました。



玉御殿

高い石牆に囲まれて堂々とした石造墓室は、東室・中室・西室からなっています。琉球の葬墓制の伝統を承け継ぐ崖葬墓、堀込墓室として築かれていますが、宮殿（当時の首里城正殿）の様式をもとにした最初の、かつ最大の石造建築墓です（沖縄ではこの形式の墓を「破風墓」とよんでいます）。1924年に沖縄の歴史的建造物を調査した伊東忠太は、玉御殿を「嵩高偉大なる建築」と高く評価しました。

画期的なこの形式と、1768年からそこで営まれた清明節せいめいせつの祖先祭祀は、琉球・沖縄の人々の墓の建築とその祭祀、清明祭しーみーに大きな影響を与えました。玉御殿は琉球・沖縄の葬墓制の歴史において革新的また規範的な存在なのです。

さらに玉御殿はたんなる陵墓と片付けられない特性をもっています。王家の祖先神（祖霊神）や神となった歴代の王を祀る神殿とも、また御嶽や聖域グスクとも考えられます。玉御殿は琉球固有の信仰にもとづく唯一無二の



玉御殿（東室）

神殿建築といわなければならないのかもしれませんが。

園比屋武御嶽石門は、一間平唐門の形式をもち、左右に短い石牆がついています。サンゴ石灰岩を用い、日本と中国の木造建築様式に則して造形しています。木製の扉を備えています。出入り口としての機能はなく、石門の背後に広がる森、すなわち園比屋武御嶽を拝する場所でした。国王や聞得大君（最高位の神女）が道中の安全を祈願しました。今は、門自体が拝所になっているそうです。



園比屋武御嶽石門

崇元寺は尚真王の父、尚円王が創建した琉球歴代王朝の宗廟（国廟）です。その第一門（15世紀末～1527年以前）は、石造三連アーチ門の左右に石牆を組み合わせた独自の形式をっています。



旧崇元寺第一門及び石牆（内側から）

ところで、木造建築では、近世琉球の18世紀中頃以降のものしか残されていません。久

米島の上江洲家住宅（1754頃）、石垣島の旧宮良殿内（1751-1829）と権現堂神殿・拝殿（1786頃）、沖縄本島の中村家住宅（19c初期）が最古級なのです。このうち権現堂は臨済宗寺院桃林寺の鎮守ですが、三間社流造の神殿と寄棟造の拝殿は、細部の装飾や赤瓦の屋根など、沖縄独自の様式をもっています。この18世紀末の権現堂が、近世以前にさかのぼる本格的な様式の社寺建築として、沖縄に残された、たった一つの遺構となっているのです。

外来宗教・信仰の建築

琉球では遅くとも14世紀には寺院や神社が建てられていたようです。その後、琉球王国の庇護をうけ、臨済宗の円覚寺や真言宗の護国寺、波上権現（波上宮）をはじめ、多くの社寺が創建されました。



波上宮 琉球八景の一つ「筍崖夕照」

日本からと同じように中国からも仏教（臨済宗）をはじめ道教、民間信仰などが伝来しました。明との外交・貿易を担った那覇港にほど近い地域、波上では、古琉球期の15世紀前半には中国・福建から渡来した人たちによって航海安全の天妃宮（天后宮・媽祖廟）と道教の天尊廟、また大安禅寺などが建てられていました。

波上には波上権現と護国寺もあったので、宗教・信仰の聖地をいうこともできるでしょう。

那覇港の建設にあわせて造営された港町「那覇」（狭義の那覇）にも、第一尚王統の尚巴

志王によって下天妃宮や龍王殿、沖権現・臨海寺が創建されています。那覇港の近くに国際的な宗教・信仰施設が配置されたのです。



波上 天尊廟（左）と天妃宮（右）



波上 波上宮と護国寺

近世琉球の時代、17世紀にも新たな信仰がもたらされました。中国古来の土地神、「土帝君」を祀るものです。沖縄では農業や漁業、また悪魔祓いの神としても信仰されています。
瀬底土帝君は、本島北部の本部半島の西端



瀬底土帝君

近くに位置する瀬底島にあり、県内最大級の規模をもっています。珊瑚岩の石垣によって整然と区画された敷地に、赤瓦葺（もとは茅葺）、石造の本殿や拝殿が中軸線上にならびます。18世紀中頃の建設とみられています。

グスクと御嶽

さて、沖縄文化遺産はいずれもが特色豊かなのですが、なかでも独自性の色濃いグスクと御嶽は代表的な沖縄文化遺産といえるでしょう。

300あまりのグスクとおよそ1000以上あるともいわれる御嶽は、沖縄・琉球の歴史と文化の核心をなすものです。また、ウチナーンチュの‘こころ’と深く結びついた‘ところ’ということもできるでしょう。グスクと御嶽は、ほかのだれよりもウチナーンチュにとって、きわめて大切な文化遺産であることはいうまでもありません。とはいえ、グスクと御嶽はまた、「顕著な普遍的価値」をもっています。それゆえに、2000年に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」が世界遺産リストに登録されたのでした。

この構成資産は、^{なきじんじょうあと}今帰仁城跡、^{ざきみじょうあと}座喜味城跡、^{かつれんじょうあと}勝連城跡、^{なかぐすくじょうあと}中城城跡、^{しゅりじょうあと}首里城跡の5つのグスクと、^{しきなん}玉陵（玉御殿）、^{せいふわく}園比屋武御嶽石門、^{せいなん}識名園、^{さいばう}斎場御嶽の4つの関連遺産からなっています。

5つのグスクは、琉球の歴史と文化を語るうえで欠くことのできない巨大グスク・大型グスクの遺跡（史跡）であり、また長期にわたった琉球の社会空間構造の象徴です。

4つの関連遺産は、いずれも琉球王国・王権に深くかかわる資産で、王家の陵墓（国宝・史跡）、御嶽の門（重要文化財）、王家の庭園（特別名勝）、琉球王国至高の聖地（史跡・名勝）です。

名称からすぐに御嶽とわかるのは斎場御嶽と園比屋武御嶽だけです。しかし、グスクということばにはもともと「城郭」と「聖域」（「御嶽」）の意味がありましたが、そのこと

が示唆するように、多くのグスクはそのなかに御嶽があります。



龍潭から仰ぎみる首里城



識名園（南苑）

たいへん興味深いことですが、5つのグスクにもすべて御嶽があります。今帰仁グスクや首里グスクの御嶽は、斎場御嶽とともに琉球開闢神話と深い関わりがあり、とくに有名で重要な御嶽なのです。玉御殿が御嶽でもあるとすると、9つの構成資産のうち、識名園



斎場御嶽

を除いた残りはすべて御嶽を内包するという事です。古来より現代にいたるまで継承された沖縄固有の信仰の形態を残す希少な証拠として、価値が評価されたのでしょう。

首里城——沖縄・琉球の歴史と文化の象徴

およそ500年にわたって琉球王国の政治拠点そして国王の宮殿となったのが首里グスクです。面積が4万㎡をこえる巨大な複郭構成のグスクです。主郭は正殿と御庭が中心となっています。王権にとって重要な首里森御嶽や真玉森御嶽などの御嶽もありました。首里グスクが、首都首里の都市形成の核となり、地域統合のシンボルとなったのは当然のことでしょう。

第二尚王統の時代、それも16世紀に入ると、多くのグスクはその機能を失い、遺跡となっていました。その結果、「グスク」ということばは、生きている唯一のそして最大のグスク、すなわち首里グスクを指すようになりました。首里城正殿もまた、唯一のそして最大のグスク正殿となり、いくどか火災に見舞われながらも再建され、近代には沖縄神社拝殿として利用されるなどしながら、沖縄戦まで存続しました。

1992年に史資料にもとづいて正確に復元された首里城正殿は、世界遺産登録に際しても「今や琉球の人々の誇りを象徴する偉大なモニュメントとなっている」と評価されました。しかし、2019年10月31日、突然の火災により首里城正殿をはじめ復元建物群は全焼してしまいました。

沖縄の文化遺産は、世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」が体现するように、東アジア、さらにはユーラシアのなかで独自の特色をもつ沖縄・琉球の歴史と文化を伝えていきます。

沖縄県の文化遺産リスト

種別	遺構
世界文化遺産	今帰仁城跡（なきじんじょうあと、13c末～）、勝連城跡（かつれんじょうあと、13・14c～）、首里城跡（しゅりじょうあと、14c中～）、座喜味城跡（ざきみじょうあと、15c前～）、中城城跡（なかぐすくじょうあと、15c中～）、玉陵（たまうどうん、1501）、園比屋武御嶽石門（そのひゃんうたきいしもん、1519）、識名園（しきなえん、1799）、斎場御嶽（せーふあうたき）
国宝（建造物）	玉陵（たまうどうん、1501）
重要文化財（建造物）	〔本島〕 旧円覚寺放生橋（ほうじょうばし、1498）、玉陵（たまうどうん、1501）、天女橋（てんによばし、1502）、園比屋武御嶽石門（1519）、旧崇元寺第一門及び石牆（そうげんじだいいちもんおよびせきしょう、1527以前）、伊江御殿墓（いえうどうんばか、1687）、瀬底土帝君（せそことーていーくん、1751-1829）、喜友名泉（ちゅんなーがー、1751-1829）、中村家住宅（19c初期）、新垣家住宅（19c後期）、津嘉山酒造所施設主屋（つかやましゅぞうしょ、1928）、仲村渠樋川（なかんだかりひーじゃー、1912）、大宜味村役場旧庁舎（おおぎみそんやくばきゅうちようしゃ、1925） 〔伊是名島〕 玉御殿（たまうどうん、1688）、銘苺家住宅（めかるけじゅうたく、1906） 〔慶留間島〕 高良家住宅（たからけじゅうたく、19c後半） 〔久米島〕 旧仲里間切蔵元石牆（きゅうなかざとまぎりくらもとせきしょう、1716-1735）、上江洲家住宅（うえずけじゅうたく、1754頃） 〔宮古島〕 豊見親墓 あとんま墓（とうゆみやばか あとんまはか、1830-1867） 〔石垣島〕 旧和宇慶家墓（きゅうわうけいけはか、17c）、旧宮良殿内（きゅうみやらどうんち、1751-1829）、権現堂神殿・拝殿（ごんげんどう、1786頃）、旧和宇慶家墓（きゅうわうけいけはか、17世紀後期頃） 〔竹富島〕 旧与那国家住宅（きゅうよなぐにけじゅうたく、1913）
特別名勝	〔本島〕 識名園（1799）
名勝（庭園）	〔本島〕 首里城書院・鎖之間庭園（しゅりじょうしょいん・さすのまていえん）、伊江殿内庭園（いえどうんちていえん）、伊江殿内別邸庭園（いえどうんちべつていえん） 〔石垣島〕 宮良殿内庭園（みやらどうんちていえん）、石垣氏庭園（いしがきしていえん）
重要文化的景観	今帰仁村今泊のフクギ屋敷林と集落景観 北大東島の隣鉾山由来の文文化的景観
重要伝統的建造物群	竹富町竹富島（たけとみちょうたけとみじま）重要伝統的建造物群保存地区 渡名喜村渡名喜島（となきそんとなきじま）重要伝統的建造物群保存地区

第4話 「琉球」発見 ～大切な記憶がよみがえる

琉球・沖縄にとって重要な歴史的事実を明らかにした、二つの「琉球」発見を取りあげましょう。「旧都浦添」と「琉球建築」の発見は、いずれも琉球の歴史と文化を正しく深く理解し直すことにつながりました。新たな史実や価値を知ることができ、沖縄と世界のウチナーンチュの大切な記憶がよみがえることになったのです。

一 「旧都浦添」の発見——史実を知る

もう1世紀以上も前、明治38年(1905)に『琉球新報』紙上に発表された、伊波普猷(1876-

1947)の「浦添考」^{うらそえ}がその発端となりました。のちに「沖縄学の父」と呼ばれることになる伊波は、そのとき東京帝国大学の学生でした。伊波は、数年後の1911年に処女作『古琉球』

を刊行しますが、そこに「浦添考」も収録され、浦添が首里以前の王都であることが世に知られるようになります。

固定観念からの解放——伊波普猷と東恩納寛惇

この浦添旧都説が革新的なのは、疑われることのなかった社会通念を打破したからです。それまでは、琉球最初の王統と古くから伝わる天孫の時代から近代まで、変わることなく首里が国都であったと信じられていました。伊波は、そうした常識をくつがえし、近代の学問によってあらたな琉球史像を提示したのです。

16世紀の尚真・尚清王の時代には、伝説的な天孫はともかく、その後の舜天・英祖・察度の三代の王統、すなわち中山王権を正しく承継ぐのが第二尚王統であるという意識があったといわれています。一貫して琉球国都たる首里を継承しているということもまた、琉球王権の正統性を示す証左であったのでしょう。

伊波普猷は、浦添ははたしていかなる所であったのか、を課題としました。そして「うらおそい」が「うら（浦）おそふ（襲）」という言葉の名詞形で、浦々を支配するところ、国を治めるところ、という意味をもっていると考えました。そうして、浦添は首里以前においては「沖縄島の中心」であっただろう、と述べたのです。伊波自身は、浦添を古都とも旧都とも都とも書いていないのですが、仮説として浦添旧都説を提示したと考えてよいのではないのでしょうか。

伊波から4年後、沖縄歴史研究の先駆者である東恩納寛惇（1882-1963）は、「浦添村」の解説で、「ウラオソイ」は「浦々を支配する」の義なる事已に島尻郡の条下にも説きたり。首里以前の王都といふ」と記しました（『大日本地名辞書 続篇（第二 琉球）』富山房、1909。のちに『南島風土記——沖縄・奄美大島地名辞典』沖縄文化協会・沖縄財団、1950）。

「島尻郡の条」には、「しまおそひ」は「うらおそひ（浦添）」などの「おそい」と語源

が同じで、「共に島を支配するの義なりと曰ふ、此説已に文学士伊波普猷氏の称ふる処たり」とあります。伊波説に賛同し、しかもよりも強く「首里以前の王都といふ」と述べ、さらに史料をあげて浦添旧都説を強化しました。

ところで、伊波普猷は1932年の『琉球新報』紙上に、「首里」の語源は結局わからない」という一文を発表しました。興味深いのは、タイトルとその内容もさることながら、副題が「東恩納学士の浦添旧都説を裏書きすべき一史料」となっていることです。そして本文冒頭にも「初めて浦添旧都説を唱へた同君」とあります。伊波は、浦添旧都説の提唱者を東恩納寛惇と考えていたのです。

この小論文は、1933年（昭和8）から1年間東南アジアや中国を探訪することになった東恩納の門出を祝うために書かれた献呈論文で、『明実録』を史料として東恩納の浦添旧都説を補強しました。

そこには旧稿「浦添考」について率直な反省も記されています。伊波は「古くは浦添の範囲が今日よりも広く、首里を中心とした牧湊、泊、那覇の三港を抱有する地域であったに違ひないなどと無理な臆測をして、浦添城を中心とした所に国都のあったといふことには気がつかなかった」といいます。一方、東恩納の浦添旧都説については、「当時の中山の国都は浦添であったに違ひないと喝破された。沖縄の正史には遷都の記事がないからといって、疑ひを挟んだ人もあったが、私は早速同君の説に敬意を表した」とあります。

伊波普猷の『古琉球』と東恩納寛惇の『南島風土記——沖縄・奄美大島地名辞典』は、ともに版を重ねました。二人がそれぞれの所説を補いあったことが、いっそう浦添旧都説を普及・定着させたのでしょう。1983年刊行の『沖縄大百科事典』では、「首里以前の古都として知られている」となっています。

王都浦添と「琉球国中山王」察度の時代

琉球王国時代の第二尚王統は、自身を舜天王統・英祖王統・察度王統の系譜に位置づけ

ていました。舜天王統は王が存在したかどうかもさだかではありませんが、浦添を王都とした察度王統がたしかな歴史的事実であることは、明の歴代朝廷が編纂した『明実録』から明らかです。

この察度王統の王都「浦添」は、どのような都市なのでしょう。

その中核はいうまでもなく浦添グスクです。沖縄本島の南部にあり、東南から西北にのびる細長い琉球石灰岩丘陵の東端、標高130m～140mのところを築かれています。南側は緩斜面、北側は断崖ですが、北の崖を掘り込んで浦添グスクの王の陵墓、「浦添ようどれ」が造られています。

浦添グスクの北方、西海岸には古くから利用された牧港がありました。一方、西南に少し離れた那覇島の一角、東シナ海に面した波上は、14世紀後半には海外諸国の船が出入りする新たな交易の港、海域アジアの交易にかかわる中国人などの海商の根拠地・居住地になっていました。日中間の航路、いわゆる「南島路」が活発化したことが港湾都市・波上を形成したのです。

14世紀後半、中山王の察度（在位1350～1395年）が拠点とした時期には、浦添グスクは石積みの城壁で囲まれた4万㎡をこえる大規模なグスクとなり、中心には瓦葺きの正殿が建てられていました。「癸酉年高麗瓦匠造」や「大天」などの銘のある「高麗系瓦」が大量に見つかっています。ほかに中国や高麗、東南アジア、日本との交易を示す遺物も、数多く出土しています。

圧倒的な規模のグスクを構築することができた最大の要因は、1372年明の太祖洪武帝の要請に応じて、察度の中山が明の冊封・朝貢体制下に入ったことでしょう。察度は、「琉球国中山王」として王権をはじめ政治・外交・経済の基盤を飛躍的に強固にし、さらには強大な明の権威を背景に海洋貿易国家への道筋を確立したのです。その一端を担ったのが、海港波上と新たな海商勢力（華僑）でした。

ところで、明の永楽帝は1404年琉球に使者

を派遣しました。1395年に死去した察度王をとむらう儀式「諭祭」をおこない、武寧を「琉球国中山王」に冊封するためです。これが琉球最初の冊封とされています。

こうした冊封に備えて、察度王や武寧は、どのような施設を用意していたのでしょうか。

冊封使を迎える「迎恩亭」、滞在施設の「天使館」などがあつたかどうかは不明なのですが、諭祭さらには祖先祭祀の場として不可欠な、歴代中山王の廟（後代の中山国王廟＝国廟）が建設されていたことは、疑えないでしょう。

察度・武寧王が国廟としたのは極楽寺（前王統の菩提寺）と考えてよいと思います。第二尚王統初代の尚円王は浦添に龍福寺を創建しましたが、それは極楽寺の由緒を引き継いだ「歴朝の宗廟」だったのです。

察度王はまた、王家の菩提寺として真言宗頼重法印を開山とする護国寺を創建しました。護国寺は浦添グスクの西にあり、のちに那覇の波上権現（波上宮）の隣に移りました。16世紀前半以降の護国寺は、「国家鎮守の祈願所」として第二尚王統と深いかかわりを持ち、その尊崇と庇護のもと真言宗首位の寺院として、臨済宗首位の円覚寺とともに、琉球の宗教社会において重要な位置を占めました。

以上のように、浦添グスクの周辺には王陵「浦添ようどれ」や王家の菩提寺護国寺、国廟の極楽寺などの寺院があり、また大きな池、豪族屋敷などがあつたことが判明しています。「琉球国中山王」察度の王都浦添は、統一琉球王国の首都首里に先行する構成を備えていました。というよりも、第一尚王統の首里が、浦添の基幹施設の配置ないし都市構造を踏襲したのでしょう。

浦添ようどれと察度王陵の謎

「旧都浦添」が発見され、定説となったことにより、琉球王国成立以前の中山王のグスクを浦添グスク、その陵墓を浦添ようどれとする説も定着しました。浦添ようどれは東室

(上位)と西室(下位)からなりますが、西室が英祖王、東室が第二尚王統の尚寧王と伝わり、そのように信じられています。

浦添グスク最盛期の中山王、察度は、どこに葬られたのでしょうか。



浦添ようどれ
手前が英祖王陵、奥が尚寧王陵とされています。

二 「琉球建築」の発見——価値を知る

伊東忠太と沖縄調査

伊東忠太(1867~1954)は、建築史学者として日本建築史と東洋建築史を体系化し、歴史的建造物の保存に尽力しました。また1902年から中国・インド・トルコに留学し、その後ヨーロッパなどを歴訪しています。帰国後の1905年、東京帝国大学工科大学教授に就任しました。一方、平安神宮(1895)・明治神宮(1920)などの創建神社を設計するなど、建築家としても活躍しました。

伊東は、1924年7月末から20日間、沖縄に滞在して、歴史的建造物の現地調査を実施しています。背景・動機には、鎌倉芳太郎とともに琉球芸術の研究を開始したこと、また取り壊し寸前であった首里城正殿の保存に取り組んでいたことなどがありました。出発前には東京で東恩納寛惇に会って、親しく沖縄の事情を聞き、また沖縄では伊波普猷とも会っています。しかし、おもしろいことに、伊東は首里城について「天孫氏の時代から国王の居城であったと考えられている」と書いています。伊波も東恩納も、「浦添旧都」説を説

明しなかったのでしょうか。

それはともかくとして、調査の成果は、滞在中の講演会で発表され、帰京後も講演や雑誌『科学知識』連載などを通じて公表されています。数年後に「琉球紀行」と題して著書『木片集』(萬里閣書房、1928)に収録され、好評を博しました。その後、加筆・上梓されたのが、『琉球——建築文化——』(東峰書房、1942)です。

琉球建築の評価

価値あるものとは思われず、取り壊されていた「琉球建築」を、伊東はどのようにみたのでしょうか。感想・評価の一端を紹介しておきましょう。

園比屋武御嶽石門は、「琉球固有の宗教建築で今日現存する最善最美なもの」であり、全体の姿が「得も云はれず美しい」といっています。玉陵(玉御殿)は、「何等建築としての奇も巧もないが、慥かに崇高偉大な建築」と評しています。しかしながら、実は「奇も巧も」豊かな建築といえるでしょう。

首里城正殿は、「琉球建築の代表的大作」と述べていますが、崇元寺第一門・石牆と比較するなかで、伊東の評価の内実がよくわかります。

崇元寺石門の評価はたいへんおもしろいので、長文ですが、引用します(表記は常用漢字・現代語に改めています。括弧内は引用者の注記です)。

一見最近の西洋式ハイカラ建築のようで、これこそ実際琉球随一の美建築であると断言するに躊躇を要しない。首里城正殿は由緒の尊いのと規模の壮大と手法の特殊とを以て優るが、美の点に於ては完全無缺とは云えない。圓覺寺の殿門は様式の純真と手法の確實とを以て勝るが、獨創的意匠は豊富とは云へない。

しかるにこの門は規模は大きくなく、手法は簡単であるが、その中央部と左右翼との取り合せの自然なこと、その相互の広表幅員の權衡(バランス)を得たこと、その全部の輪郭が簡明で要を得たこと、

その線が少なく一つも無駄のないことなど、数え
ると限りない美点が現われて来る。一見素朴なよう
で、よく凝視すると益益豊富である。一瞥粗野に見
えるが、よく観察するといよいよ高雅である。極めて
無造作なるに似て、実は苦心惨澹の作であり、甚
だ浅薄なるに似て、重厚深刻の作である。要するに
この門は旧来の因襲に拘泥せず、新たに独創的意匠
を試みたもので、清新澀刺な気分が横溢している。
この時、この地においてこの建築に邂逅したのは私
の最も意外とする處である。

この批評のスタンスは、建築家伊東忠太の
面目躍如というところでしょうか。

伊東忠太と「琉球建築」

ところで、「琉球建築」ということばを、
伊東はもともと琉球王国時代の建築の総称と
して使っていました。しかし、「特色ある風
土と歴史から生まれた琉球固有の文化、その
文化の表現である独特の墳墓・橋梁・神社・
仏寺・宮殿・民家・廟など」を調査するうち
に、伊東はそれらの価値に気づきました。そ
れらは「芸術の燦然たる光輝」を放っていた
のです。伊東は「古き伝統と不滅の輝きをも
つ琉球芸術」、すなわち「琉球建築」を発見
したのです。

伊東は「琉球建築」をどのように理解し
ようとしていたのでしょうか。枠組のキー
ワードはすでに明らかでしょう。琉球、風土、歴
史、文化、芸術、建築などです。そして伊東
は、東洋建築という広大な世界のなかに、新
たなカテゴリー「琉球建築」を位置づけよう
としたのです。伊東は、「琉球建築」は東洋
建築の一方の勢力である中国系統の建築の一
分派であって、朝鮮、日本、ベトナム、台湾
などと肩を並べるべきである、と主張してい
ます。

那覇滞在中に開催された講演会の要旨をも
とに、当時の野帳や『琉球——建築文化——』
も参照しながら「琉球建築」の枠組を図式化
すると、次のようになるでしょう。

①分類（宗教—非宗教）→細分類

宗教建築：琉球固有の神祠、(外来の)神社・
仏寺・道観（道教）・文廟（儒教）

非宗教建築：陵墓、城堡（グスク）、宮殿・
邸宅、農家・倉、橋

②類例と説明、価値の評価

③特色——(1)古調、(2)のんびりした気分、(3)
精巧・優美、(4)海外諸国の影響

④位置づけ——東洋建築のなかの「琉球建築」

⑤保存の意義——豊富で多彩な歴史的・芸術
的（建築的）価値の継承

伊東は、玉御殿・園比屋武御嶽石門・崇元
寺・円覚寺・首里城正殿などそれぞれの価値
を見出し、それらの建築文化遺産を基礎とし
て、整然と「琉球建築」を構築しました。そ
して、「琉球建築」の地域的・歴史的・文化
的価値、さらに芸術作品としての建築的価値
を高らかに褒め讃え、その保存を強力に推進
しました。

こうして表舞台に登場した独自の「琉球建
築」は、2000年には世界の脚光を浴びること
になりました。「顕著な普遍的価値」が認め
られ、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」
として世界遺産リストに登録されたのです。

●おわりに——アイデンティティの再発見

神話・伝説からヒストリーへの転機となっ
た「旧都浦添」の発見は、古都首里の再発見
でもありました。独自の「琉球建築」を自覚
したことは、伊東忠太が期待したように、独
自の建築文化の創生に結びついたのではない
でしょうか。

大切な記憶をよみがえらせる「発見」は、
ほかにいくつもあるでしょう。時代名称とも
なっている「グスク」の発見や、地域の自然
と歴史と文化を鮮烈に切りとる「琉球八景」
の発見も、沖縄のアイデンティティの再発見
につながり、大切な記憶がよみがえる事例の
一つなのかもしれません。